

動物園40年 歩みを振り返り、 そして未来を展望する。

園長 小松 守



巻頭のあいさつでもふれましたが、大森山動物園は、昭和48年(1973年)9月1日の開園以来、40年の歴史を積み重ねてきました。今年はその節目の年に当たります。40周年のテーマは「つながり」です。これまでを振り返りながら、未来を展望してみたいと思います。

大森山動物園の始まりから振り返ります。都市公園法の成立を背景に全国的な公園整備が進められていた昭和40年代、秋田市も同様に大森山公園の整備に着手、コンセプトに「大森山こどもの国」を掲げました。その目玉は動物園建設でしたが、それは秋田市中心部にある千秋公園に当時あった児童動物園の移転が目的でした。

ここで着目したいのは、当時の児童動物園の成り立ちです。昭和25年(1950年)、創設者であった当時の秋田県知事の言葉、「こどもたちに光明を」が印象的です。こどもの心の育成が動物園の始まりでした。「大森山こどもの国」は、こうした精神を継承し、人と動物とのシンクロナイズを意識し、うたいあげている大森山動物園のテーマ「動物と語らう森」にも影響を与えています。

さて、ここからは開園以降の節目となった整備や出来事を拾い上げてみます。

40年の歳月で展示内容や施設も大きく様変わりしました。開園初期多かった入園者数も減り始めた昭和56年、大森山へのテコ入れとしてサル山が建設されました。その後の動物園運営に影響を与え続けた施設であり、今なお人気スポットの一つとして存在し、大森山動物園成長の原動力を担ってきました。翌年には中国甘粛省蘭州市から友好都市締結の記念として雌雄のフタコブラクダが秋田にやってきましたが、素晴らしい繁殖成績を残し、その子孫は全国で飼育され、中国からの子孫は今なお命をつないでいます。

▼完成した当初のサル山



▲新たに整備されたゾウ舎

こうしたこともあり大森山動物園への関心が高まり、やがて動物園の拡充整備への機運盛り上がりへと変化していったのです。当時、秋田市は市制100周年で幾つかの事業が計画されましたが、その一つに動物園へのゾウ・キリン導入の声が市民や議会からあがったのです。まさに昭和が終わろうとしている頃でした。実際の展示は平成3年4月のことでした。大型動物の導入と動物園の拡充に伴って、大森山動物園は特別会計に移りましたが、これらの整備や出来事は、大森山40年の歴史で特筆すべきものとと言えます。

この時に併せて整備された大型のイヌワシ舎建築はその後、成果を現し、国内でも珍しい森の王者イヌワシの繁殖へと結びつきました。このことは秋田の動物園を全国にアピールすることにもつながりました。

平成9年には、動物とのふれあいを楽しむ「ふれあいランド」が完成、近年の学習プログラム制や動物園の学校利用増加



▲イヌワシの繁殖

▼動物のぬくもりを感じるふれあいランド



に結びついたのです。こどもの心を育む動物園というスタンスもあり、ふれあいランド開設時、こども料金の無料化も始まりました。

平成13~15年にかけては開園当初からの施設であり、ライオン、トラ、そしてチンパンジーまで飼育していた総合動物舎が改修され、「チンパンジーの森」、「王者の森」などが登場しましたが、この時期は、動物園の再整備の必要性が議論された時代でもありました。平成19年から現在の研修ホールミルヴェ館(管理事務所)や森のびょういん(動物病院)、アソヴェの森などの建設が次々と推進された時代でした。

一方、整備とは異なった大森山動物園への市民の意識、イメージを大きく変える出来事もありました。それは、平成14年にあったあの「義足のキリンたいよう」の物語でした。義足の生活が余儀なくされながらも懸命に生きようとした仔キリン、「たいよう」の命への応援は全国的な話題ともなり、時に大森山動物園の存在意義さえも議論の対象にのぼるようになりました。

そうした市民の思いは平成17年の「秋田市大森山動物園条例」の制定となって実を結んだのでした。創立後長い年月が経過した動物園が新たに設置理念を内外に示すのは、全国でも珍しいことでした。

そんな動きはさらに、輪を広げ、変わりゆく大森山を支えようと市民ボランティアが発足したのもこの頃でした。



▲義足のキリン「たいよう」と父「ジュン」

▼ボランティアガイドの活動



ガイドや案内役をつとめるボランティアガイド「たいようの会」や花での動物園魅力アップをするガーデンボランティアさんなどです。さらに市民の動物園支援はエサ寄贈などにも広がりを見せるようになる他、平成23年には大森山動物園を本格的にサポートしようと応援会も結成されるようになりました。

さて、最近、建設後40年以上が経過した大森山公園の施設の老朽も問題にのぼるようになり、動物園を公園全体で見直す発想も浮かび上がってきました。大森山公園、動物園を観光資源としてより強化して役割を与えようという秋田市のスタンスの現れでもありました。平成21年度には市民委員会による「大森山自然動物公園構想」がつけられ、公園、動物園の再整備の始まりとしてビジターセンターの建設を最優先と位置づけた計画が進められています。現在の正面ゲートを改修し、総合的な機能を持たせ、ゲートへのバスの乗り入れ、屋上からの動物園展望、遊園地やふれあいランドとの連携回遊の創出、ウェルカム動物でのお出迎え、などなど40周年節目の年に相応しい、大森山動物園・公園の新たなステージの始まりにつなげて行きたいと考えています。

今、動物園の所掌事務に大森山公園全体の管理も含まれる時代になっています。それは公園全体のプロデュースと再整備の推進の役割を担ったということです。公園の中の動物園という意識から、動物園を活かした公園づくりと公園の利用促進に努める役割です。

「動物と語らう森」を大森山の豊かな自然の森にまで広げ、森の命とともに動物の命をも感じることでできる、自然動物公園に変えていきたいものです。日本人が深層で意識する自然と生き物との共生を新たなテーマとして重ね合わせ、施設に常に魂を込めることを忘れることのないようにしながら…。

▼ガーデンボランティアの花壇

